

1 や はた がわ
八幡川

八幡川は、延長20.9km、流域面積83km²の二級河川です。もともと現在の位置より約1km西にありましたが、江戸時代初めに瀬替えにより現在の位置に変わりました。八幡川は太田川と同様に、下流に大量の砂を流し出すため、そこから井口の埋め立てが進められました。昭和46年(1971年)、全国に先駆けて水鳥の捕獲を禁止したところ、3,000羽を超える水鳥が集まり、水鳥の飛来地として広く知られるようになりました。



2 が き くび じ ぞう
餓鬼の首地蔵

昔は険しく立つ小山のことを「がき」と呼んでいました。阿瀬波(汗馬、現在の井口四丁目)の西端に位置する山の突端におよそ10mのお椀を伏せたような小山があり、それを首に見立て「餓鬼の首」と名付けたと伝えられています。ある時、船が暴風雨に遭い船頭が亡くなったため、その家族が山に洞穴を掘り、お地蔵さんを祀り供養しました。その場所が餓鬼の首といわれていたので「餓鬼の首地蔵」と呼ばれ、海の安全を祈願していました。その後、地蔵は五日市との境に移され、「境地蔵」とも呼ばれるようになりました。



3 かい どう まつ
街道松

西国街道は江戸時代の交通路の要衝で、街道には両側におよそ3間(約5.4m)に1本の間隔で街道松が植えられていました。井口に最後まで残っていた1本の街道松は、昭和58年(1983年)、道路拡幅により伐採されました。その松の切り株が近くの「まつのき薬局」に記念として保存展示されています。



昭和58年に伐採された街道松
写真提供 山根明美氏

4 し お が ま じん じゃ
塩釜神社

塩釜神社には塩椎神が祀られています。「塩」は「潮」のことで、潮流をつかさどる神、海路の神、航海の神などといわれています。塩釜神社は昔、現在の位置より少し右奥にあり、人々が谷川の清水で喉を潤し、老松の木陰で休んでいました。



5 どう ろ ひ
道路碑

明治6年(1873年)、草津村の小泉甚右衛門氏ら有志が中心となって、海岸を埋め立てた平坦な道路を完成させ、交通の難所であった龍神山を通る小己斐峠の難路が解消されました。それを記念して、明治10年(1877年)、旧国道(井口電停北側)に石碑が建てられました。現在は井口高校北西角に移されています。石碑正面には、千家尊福出雲大社宮司が、厳島詣の際にこの新道ができたことを喜び、道路建設にかかわった人々の功績を感賞のあまり詠まれた歌が刻まれています。



6 こ ご い みょうじん
小己斐明神

小己斐明神は、平清盛が厳島神社を建立した際に鈴ヶ峰から木を切り出し、木印を押し、筏を組み、木材を送り出したことから「木印の明神」と呼ばれていました。また、子宝の神さまともいわれ、別名「子乞明神」とも呼ばれていました。寛政3年(1791年)、己斐村の人が阿瀬波地先に土地を造成し、己斐旭山神社の分神を祀ったことから、「小己斐明神」と呼ばれるようになりました。御神体は大正2年(1913年)、大歳神社に合祀されています。昭和25年(1950年)以降、この辺りは井口漁港として使用され、今も当時の雁木や防潮堤が残っています。



7 むかし いの くち こう
昔の井口港

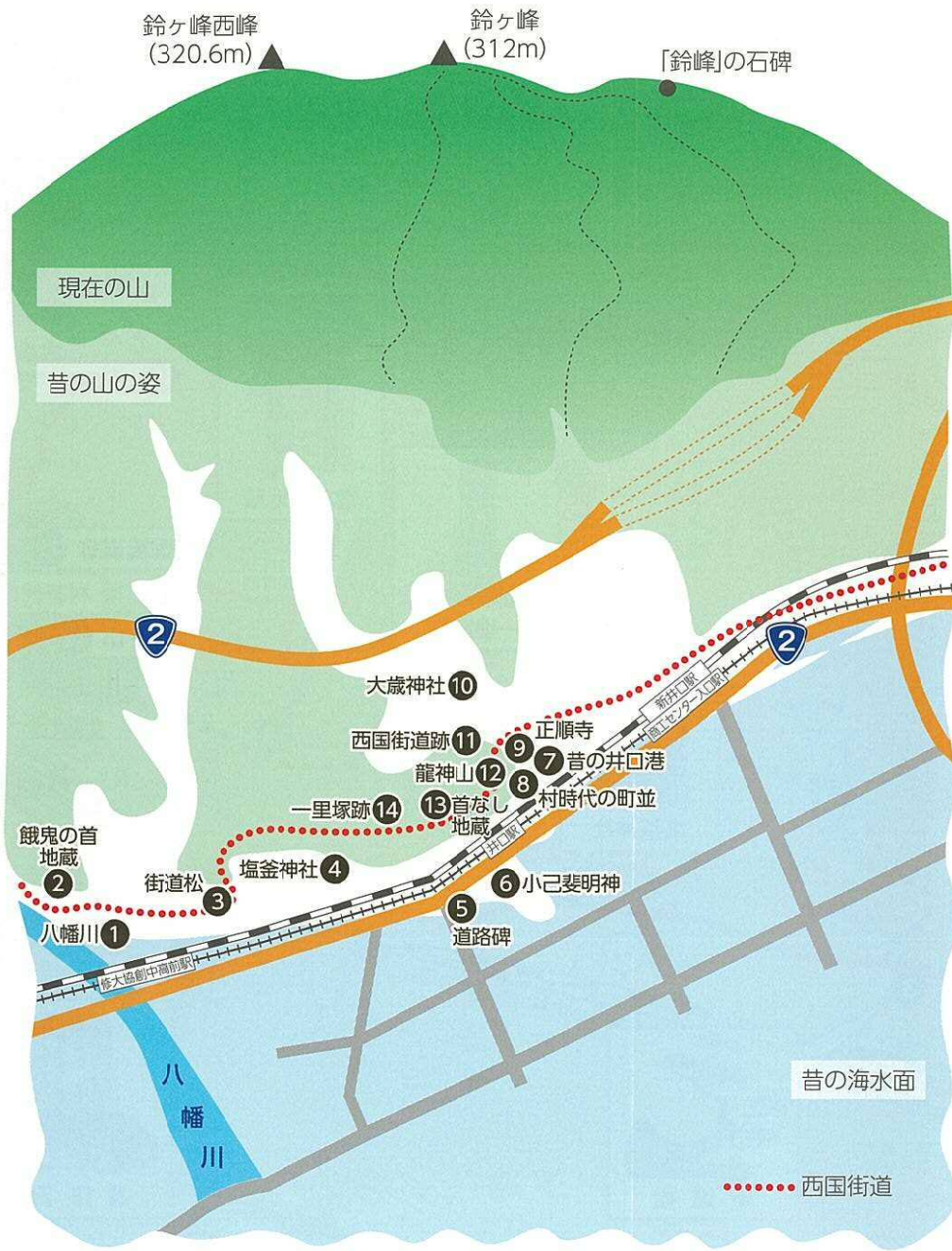
井口は昔、海に面しており、江戸時代は村民の半分は農業、半分は漁業が水上交通に関わっていました。現在の農業協同組合周辺から外国への船、交易船、宮島渡しの船が出ており、いつも船の繋留や出入りで賑わっていました。国道・鉄道・電車の開通で橋と鉄橋により船の出入りが出来なくなり、次第に使用されなくなりました。



昭和29年頃の井口一・二丁目
写真提供 畠田正雄氏

西国街道 いのくち 歴史の散歩道

～いのくち歴史ロマン～



企画・編集 井口・鈴ヶ峰魅力づくり委員会 広島市井口公民館 広島市鈴ヶ峰公民館
発行 広島市井口公民館 広島市西区役所
平成19年(2007年)発行 令和2年(2020年)3月改訂



「西国街道・いのくち歴史の散歩道」は中国経済連合会と中国地方整備局が共同で進めている中国地方における夢街道ルネサンスに平成24年度認定されました。

8 むら じ だい まち なみ
村時代の町並

明治維新前後から井口村の中心は、港のあった龍の口(現在の井口二丁目)でした。村役場や駐在所なども置かれ、村の中枢機能が集中していました。現在の井口集会所の前の通りには、当時醤油屋や米屋などもありましたが今は廃業されています。町並には昔の面影が残っています。昭和初期、電停から西は、井口海岸に面し広島郊外随一の景勝地として知られ、市内財界有力者の別荘地帯でした。



昭和5年頃の井口一丁目
写真提供 西本福次郎氏

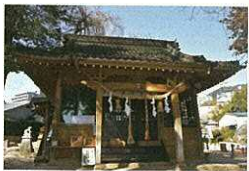
9 しょうじゅん じ
正順寺

正順寺は、昔、真言宗で正信院と称し、鈴ヶ峰の頂上付近にありました。その後、広島藩浅野家の森島権平という侍が出家し本願寺13代良如上人の直弟子となり、了恵という法名を賜り、寛永11年(1634年)、浄土真宗に改宗して現在の場所、龍の口に建立しました。当時は、現在の北門を正門として西国街道に面していました。本堂は、近郊では珍しい寄棟造で、享保5年(1720年)の銘が入る山門の梵鐘は、県内におよそ40残っている江戸鐘の一つです。この寺出身の龍口了信氏は、東京大学同級生の夏目漱石や正岡子規との交友でも知られています。



10 おお とし じん じゃ
大歳神社

大歳神社は、かつて神武東征の際に船を繋いだ場所を社地として、万寿元年(1024年)に創建したと伝えられています。活癩明神とも称し、癩瘡の守護神としても篤く信仰されていました。大正2年(1913年)、胡神社、小己斐明神、岩神社が大歳神社に合祀されました。境内には樹齢450年を超すムクや300年を超すクロガネモチ等の巨樹があります。



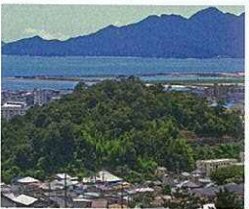
11 さい ごく かい どう あと
西国街道跡

江戸時代に、京都と下関を結ぶ山陽道を、広島藩では「西国街道」と呼んでいました。江戸時代初期に、幕府の巡見使を迎えるに当たって領内の諸往還を整備したとき、道幅は2間半(約4.5m)とし、一里塚、街道松、宿場などが設置されました。当時の西国街道が昔のままの姿で残っている所はほとんどありませんが、龍神山山道入口から約100mは、ほぼ昔のままの姿で残っています。



12 りゅうじん やま
龍神山

龍神山は、江戸時代の終わり頃、小己斐山と呼ばれていました。山の中を通る西国街道(小己斐峠)は、東の箱根、西の井口といわれたほど道が険しく交通の難所で有名でした。また、山頂は望月山と称され、月見の名所でもありました。頼山陽もこの地で遊び、賞月の詩を詠んだといわれています。



13 くび じ ぞう
首なし地蔵

伝承によると、『ある時、若い武士3人が通りかかり、そのうちの1人が「この地蔵の首を斬ってみようか」といったので、連れの2人が「この硬い首が斬れるわけがない。地蔵を傷つけたら罰があたるぞ!」と押し止めたましたが、聞こうともせず地蔵の首を斬り落としました。すると、同時に斬った武士も倒れてしまいました。よく見ると、折れた刀の先が首すじにつき刺さっていました。それからは、だれともなく「首なし地蔵」と呼ぶようになりました。』と伝えられています。



14 いち り づか あと
一里塚跡

一里塚は、江戸日本橋を起点に、各街道の1里(約4km)毎に目印として設置された塚(土盛り)のことです。広島藩では、広島城下を起点に東は26箇所、西は8箇所に設置され、井口にも、龍神山周辺に城下から2里、2番目の「一里塚」が設置されました。その場所は定かではありませんが、現在一里塚跡石碑が設置してある公園付近と推定されます。



